

ぢごく

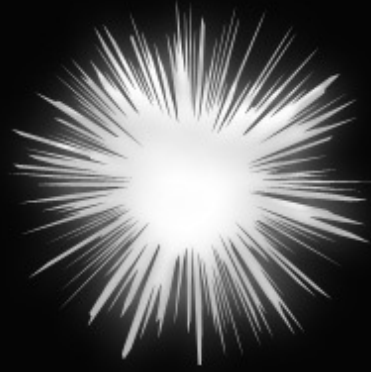
に

ほとけ



さく・みやこけいじ

フ  
ラ  
ッ  
シ  
ユ  
バ  
ッ  
タ



例えば、一昔前なら、対策も対応も真っ当なことしかできなかった。

それはつまり、解決するかしないか、一か八かの賭けに出るようなものだった。

なぜなら、人が人をいじめていた証拠など、そう簡単に記録することができなかったから。例えば骨が折れるほど殴られたり、教師の前でのあからさまなものでなければ誰も追及することができなかった。教師の前では「ふざけていました」という言い訳がいとも簡単に通るのだ。

でも、今は違う。

今ならば、きっと。

利雄はひつじを連れて公園を散歩していた。例のごとく、妻と娘は買い物に出かけていたので、二人である。まだひつじは家に来てひと月ほどしか経っていなかった。だいぶ体は大きくなったが、まだ子猫といえる大きさだった。

いろんなものをみせてやりたくてドライブがてら家から少し離れた公園へとやってきた。

「ひつじ。みずでも飲もうか」

「みゃー」

秋の風が涼しい。残暑は厳しいが、木陰に居るととても気持ち良かった。うつらうつらといつの間にか利雄は夢の中にいた。ひつじも利雄の腹の上でくつろいでいた。

殴る手。

蹴る足。

跳ね返す自分の腹。

止まない攻撃。

嘲笑。

諦め。

希望は卒業だけだったあの頃。

目が覚めたとき、ひつじの姿は無かった。腹を殴っていたのも蹴っていたのもひつじではなかった。夢の中の出来事だった。木陰は涼しいのにびしょりと汗をかいていた。おそらく利雄はうなされていたのだろう。それでひつじは逃げてしまった。それほど遠くへは言っていないはずだ。腕時計を確認して、利雄は立ちあがった。

「ひつじー。おーい。ひつじー。おやつあげるから帰ってきてよ」

あたりを探していると、一人の少年がひつじを抱えてぽつんと立っていた。飼い主を探している。利雄は太った体を揺らしながら、少年に駆け寄った。

小学生くらいだろうか。理乃と同年くらいの少年だった。儂げな雰囲気は漂う。

「ああ。ありがとう」

「何、礼などいらん」

「……」

「ん？ 拙者の顔に何かついてござるか？」

「いや、何でもない。ありがとう」

利雄はひつじを受け取るとその場から立ち去ろうとした。ちょっと変な子だなとは思ったが、うちの良子も十分変だから、今時の子はそんなもんかと無理やり納得した。そのときぶわっと強い風が吹いた。Tシャツがバタバタと音を立てる。少年は緩めのTシャツを着ていたのでちらりと、腹が見えた。利雄の目に留まったのは、少年の腹についた痣だった。それも尋常じゃない色だ。

.....虐待？ それで公園に逃げてきた？ それにしては落ちついている。

利雄は少年をお茶に誘った。お茶といってもひつじがいるので公園の隅にある売店でコーヒーとジュースを買ってベンチで話すのだが。

「はい」

「かたじけない」

「徹底してるね。武士なの」

「いえ、侍です」

名前を聞くのもどうなんだろうと思い、利雄はそのまま呼ぶことにした。

「そう。ところで、侍くんは、おうちの人はいないの？」

「家の者は、家におります」

「侍君？ 家の人優しい？」

「それは、とても」

そう言った少年の顔は優しさにあふれている。

虐待ではない？ じゃあ.....。

「言いたくないならいいんだけど、いじめ？」

侍はジュースを片手に黙りこんだ。返事がなくともわかる。彼の雰囲気ですべてを物語っている。一分ほど経過して、侍は言う。

「.....否」

嘘だと利雄は分かった。けれどもわかったところで、どうすることもできない。否、利雄はどうにかすることしかできない。なぜなら、彼もまた。

「そうか。学校はどこ？ 何年生？」

「拙者、隣の町の星空小学校、六年四組に在籍つかまつる」

娘の理乃と同じ年で同じ学校だった。クラスは違った。

「そう。じゃあ、来週あたり楽しみに待っていてよ。今月はまだお小遣いに余裕があるから。理乃に頼んで渡してもらおうよ。秋野理乃を知ってる？ 娘なんだ。六年四組に渡しに」

「それはやめてくださいっ」

触れると斬れそうな鋭い声で言った。初めて少年が言葉を崩した。

「おれなんかと関わると、その人にまで迷惑がかかります。だから、やめてください」

これまでのぼんやりとした態度が嘘のように必死だった。

「え？ 無理。もう決めちゃったもんね。会うのが駄目なら、靴箱にでも入れとくよ」

ふるふると少年は首を振った。利雄は、君には関係のないことだけど、と前置きをして話を始めた。利雄はよく自己チューと非難されることがある。

「僕は、昔からこの体型でそれはもうみんなのサンドバックだったんだ。ものごころついたころから。そして、僕はそれが当然だって思ってた。ずっとそうだったから。でもね、やっぱり年をとるにつれてどこかおかしいって思い始めた。中学生になったころかな。みんな身体が大きくなって、パンチもキックも重くなってきた。いくら僕がこの体型だからと言ってもね。限度ってものがあるんだよ。でも、結局僕が抵抗することはなかった。抵抗すれば面白がってエスカレートするから。最終的に僕には心強い味方ができて、なんとかなったんだけど。まあ、その心強い味方というのは、今の僕の妻なのだけどね。そのときも僕は誰にも言い返すことも止めてということさえできなかった。ただ僕にできたのは、守ってもらうこととそのあとに自分を少しずつ変えていくことだけだった。手段も少なかったし。学校では、先生も味方にはなってくれなかったし。でも、今ならば、ほかにもっといろいろやりようがあったと思うんだ」

だから、それをその方法を君に託したいんだ。

「もしよかったらでいい。嫌だったら、別に捨ててくれてもかまわない。今の君の状況を打開するツールと知識を理乃に頼むから」

「もう勝手にしてください。あと靴箱なら、一目でわかりますから」

少年はジュースありがとうございましたというと、走り去った。

利雄は一度ひつじを家において、貯金箱を覗いた。今月はまだ余裕がある。三万円を掴み、再び車を出した。近くの家電量販店へ向かった。利雄は、ICレコーダー、デジタルカメラの売り場を物色した。一万円分ずつ、十分なスペックのものを購入することができた。どちらも利雄が中学生の頃にはなかったものだ。そして残りの一万円でスパイショップへ行き、超小型カメラ内蔵のボールペンをひとつ、ボタンに化ける超小型カメラをもう一つ買った。ボールペン型のほうは三時間は連続録画できる優れものである。ボタンの方も一時間ほど録画可能である。

家に帰ると、利雄はパソコンを立ち上げた。そして法律についておさらいする。特に刑法について良く調べ、ワードで簡単にまとめてプリントした。振り仮名を打つことも忘れない。今ならば、インターネットで検索ボタン一つで調べられるということを知っている。そうでなくとも、図書館に行って六法全書を引けばいいことも知っている。けれど、中学生の利雄は知らなかった。

百円均一によって買ったファイルに、ICレコーダーとボールペン型カメラ、ボタン型カメラ、数枚のプリントを入れた。無駄にならないことを祈った。

「あとは、これを理乃に持っていってもらって。デジカメは理乃に渡しておくか」

万が一、理乃に飛び火がかからないことを願って、利雄はデジカメも買っておいた。

夏

祭

の

月

曜

日

抵抗するだけ無駄だった。最初は、「止めろ」とも「ただで済むとでも思ってんのか」とも「絶対後悔させてやる」とも言えた。最初は。けれど、時間が経つにつれて、人が増えるにつれて、俺は、一体、誰と戦っているんだろうと思うようになった。どれだけ抵抗しても無意味で、抵抗すればするほど、奴らは喜んだ。

鳳秋也が侍のまねをするようになったのは確か、小学五年生のころだった。テレビで見た時代劇のヒーローに憧れて、口調を真似るようになったのだ。

「参上。拙者、名乗るほどのものでもござらん。悪党どもめ、成敗致す」

そうすると、自分も少し強くなれたような気がした。もちろんそれは気のせいであって秋也が大勢にひとりで勝つことはなかった。

大勢は、陰湿で悪質な考えを持っていた。夏は半そでを着るので、奴らは必ず、足か腹を狙った。教師が来ても「優等生スマイル」というものでごまかした。微塵も気づかせなかった。ひとつひとつ秋也は希望を失っていった。

ある日、遊ぶ友達もいないので、ジョギングをしていると白いふわふわの猫を見つけた。首輪が付いているから飼い猫だろうが、あたりを見渡しても飼い主はいなかった。その場をうろうろしていると、でっぴりと太った中年のおじさんが秋也に近づいてきた。

「ああ、ひつじだっ。ありがとう、少年」

そのあと、腹の痣に感づかれて、お茶を飲み、要らぬお節介を焼かれた。部外者が何を言っても同じことだと秋也は思う。けれど、おじさんの娘が、同じ学年にいるということを知って、秋也は狼狽した。駄目だ。絶対に駄目だ。学校でおれと関わったら、どんなことになるか。それなのにおじさんは秋也の話などでんで気にせず、娘に頼むと言った。頼むって一体何を頼むって言うんだ？ 女の子に助けさせる？ そんな馬鹿な。自分の娘だぞ。巻き込まれる可能性だってあるんだ。

月曜日。

一週間の中で、一番嫌な曜日。一番嫌な朝。

あと、五日間も授業があるなど、今すぐ家に引き返したい衝動に駆られる。

それでも何とか秋也は学校についた。秋也が学校へ行くのは、始業ぎりぎりである。早く学校へついたからといって何ひとついいことなど無い。

昨日の帰りにすべて捨てたはずの靴箱には、ゴミがいっぱい詰まっていた。毎朝の事であるので何の感慨もない。いつからか悲しくもなくなった。上履きは何足も無くなった。十足目で、下校時に持ち帰って登校時に持っていくことにした。実質、下履きを入れるくらいしか靴箱は使っていないのだが、一応ゴミをゴミ箱に移して教室へはいる。と、同時にチャイムが鳴った。そう



いうふうに計算して、家を出ていた。

ゴミ箱は、靴箱だけではなかった。秋也の教室のロッカーも机の中もゴミ箱だった。特にロッカーなどは、鍵が付いているのにもかかわらず、ゴミ箱にされた。新学期の最初の日、皆ロッカーの鍵をかけて帰った。翌日秋也が登校すると、ほうきの先で鍵の隣に穴を開けられて、鍵がこじ開けられ中身はぶちまけられていたのだった。扉が閉まるだけでしたと思った。

一時間目と二時間目の間、二時間目と三時間目の間、三時間目と四時間目の間、四時間目後のお昼休み、五時間目と六時間目の間。たまにある、ホームルームの自由時間。自習の時間。体育のチーム戦。

すべてが、鬱だった。

六時間目が終わって毎日短いホームルームの時間。秋也のクラスの先生は割と長く話すほうだった。秋也はそれも少し苦痛だった。休憩時間と比較するとましではあったが。きり一つ、れーい、さよーならっ。の「らっ」で秋也は教室を飛び出した。

走ってはいけませんと張り紙のされた廊下を全速力で突っ走る。追いかけてくる奴がいる。秋也は逃げきらなければならない。誰が追いかけているのかも知らない。知っても意味がない。ただ意味があるのは、逃げ切ることだけだ。

帰る時もやはりゴミばかりの靴箱に手を突っ込む。不思議にも上履きは盗られるのに下履きは盗られたことが一度もない。ゴミの中を探って靴を掴むと、ゴミが散らばるのも構わず、思い切り引き抜いた。

ゴミが散乱する。いちいち拾っている暇は無い。目の端に目立つ色が映った。

ひとつだけ、ゴミではないものが入っていた。

『侍君へ』と書かれたファイルが落ちていた。

秋也は靴を三秒で履き替えつつ、それを拾い、校門の裏門から家へと再度全力疾走して帰った。学校ではしつこい奴らもわざわざ家まで訪ねてはこない。

家に帰って、ただいまも言わず、自分の部屋に駆け上がった。どうせ両親は共働きで夜までいない。持って走ったファイルをまじまじと眺める。これは、希望になるものなのだろうか、おれの。

「……くだらぬ」

一体、何度、希望を信じて失望してきたことだろう。最初、自分の力を信じていた。でも、ひどくなるばかりだった。両親に相談したこともあった。上履きが十足もなくなったのだ。相談せざるを得ない。結果、何も変わらなかった。いや、上履きがなくなることだけが無くなった。他のクラスの教師にも、失望させられた。

秋也はぼいっとファイルとベッドに投げ捨てて、階下へ戻った。テレビをつけてアイスをかじった。けれどもちっともテレビの内容なんて頭に入っていない。どうせこの時間はドラマの再放送か、ゆるい情報番組くらいしかやっていない。

「あーもう、くそっ」

リモコンを叩きつけるようにして秋也はテレビを消して、床板を踏み外す勢いで階段を昇った。

ファイルを開けてひっくり返した。

中から出てきたのは、A4の紙にまとめられたプリント数枚とボールペンとボタンがついた小さな機械。それに似たような小さな機械がひとつ入っていた。

「なんだ？ これ」

秋也はプリントよりも先に、機械に興味があった。どうしてこんなものをくれるのだろうと思った。ただ偶然猫を拾っただけだったのに。その疑問はプリントの一枚目を読んで、解けた。

『これは僕の子どものときには無かったもの。あとから、何年も経ってからそういう手段があるって気がついて、とても、とっても悔しくなった。あのとき、あれがあれば。これを持ってい

れば。それを知っていたら。タイムマシンがあったら、過去に自分に送りたいものです。でも自分には送れないので、君に贈ります。

君ならきっと、上手く使えるはず  
侍の君になれば、きっと』

二枚目からは、機械の使い方についての説明と法律について書かれてあった。

『このファイルに入っている三つの機械は、録音と録画をするためのものです。使い方は説明書を読んで勉強しましょう。ボールペンとボタンがカメラになっています。もうひとつがICレコーダーというもので、音声を録音できます。そしてこのあとから、法律についての説明を分かりやすく、簡単にします。

傷害、暴行、強盗、殺人未遂、名誉棄損、侮辱の罪については刑法なのであまり君には役に立たないかもしれません。良く考えてみれば、小学六年生には少年法が適用され、仮に証拠を押さえたとしてもせいぜい家庭裁判所へ送ることくらいにしかならないでしょう。ですが、知っていたらいいと思います。ひとつの手段として、一応説明しておきます。民事法の損害賠償請求ならば、ご両親の協力が必要とはいえ……』

ふむふむと秋也は読み進めた。しかし、半分ほどしか理解ができなかった。ルビがふっついていたとしてもやはり、法律には秋也の知らない言葉が多すぎた。国語辞典を持ってきて、もう一度最初から読むことにした。時間はたっぷりある。いつも走って家に帰ってから両親が家に帰ってくるまで、とても長い。

母親が帰ってきてても、父親が帰ってきてても秋也はプリントを読み続けていた。そして、午後九時すぎにようやくすべてを理解した。

そしてそこから、秋也の戦いが始まった。

「って、あれ？ 説明書入って無いじゃん……」

同刻、利雄は、机の上を見てやっちゃまったなというため息をついた。一度、機械の動作確認をして、説明書を読んでそのままだった。「理乃に頼もう……」

# 反撃の狼煙



## たった一人の味方

---

おれは、あの日から、戦うことにした。

あの子が説明書を届けてくれた、あの日から。

放課後、いつもなら即ダッシュで学校を出る秋也なのだが、今日は違った。靴箱に手紙が入っていた。そのため、秋也は放課後、靴を履き替えるとダッシュで体育館裏へと向かった。靴箱で手紙を読んだため、追手が近くまで来ていた。曲がった方向を見られてなければいいが。

息も切らさずに着いた体育館裏には、一人の女の子がいた。秋也の知らない子だった。

「あの、すみません。用事なら手短にお願いし」

顔も見ずに捲し立てた秋也は、目が合ってどきりとした。少女は、清楚で儂げな雰囲気漂わせている。小動物のような丸く大きな瞳と自然に桃色に染まるの頬、触れば柔らかそうな唇を持っていた。

か、可愛いつ……。

追手が来るのも忘れて、思わず見惚れてしまった。

「これ、お父さんに渡してって頼まれたの。あと、うちのお父さんは口先だけだからあんまり信用しない方がいいよ。あなたに何を吹き込んだのか知らないけれどね。お父さんは抵抗したことがないの。だから、あなたは実践訓練をしたことのない傭兵から護身術を教わっているようなものなの」

「へ、へえ」

「ほんとは、関わるなって言われたんだけど、酷いよね。何の犠牲も払わずに、お父さんは自分の思うように事が進むって思ってる。私は、人生そんなに甘くないんだよって思うの。だからって私はそう簡単に犠牲なんかにはならないけど」

可愛い顔をして割と辛らつなことを言う。袋を受け取りながら、秋也は名前を尋ねた。どうしても知りたかった。侍口調も忘れた。

「あ、あの。おれは4組の鳳秋也です。名前聞いてもいいですか？」

「秋野理乃。1組。私にもできることがあれば、するから。それともし私に火の粉がふりかかったとしても、私は私で何とかするから、」

理乃は秋也の後ろに視点を移し、叫んだ。

「だから逃げてっ」

秋也は反射的に身体が動く。追手がやってきていた。体育館裏からは裏門の方が近い。袋を持って秋也は思い切り走った。秋野理乃という女の子ことが心配だった。振り返るけれど、姿は見えない。巻き込まれていたらどうしよう。

せっかくできた、ようやくできた、何百人いる学校で、たったひとりの秋也の味方。

全速力で駆けながら秋也は思う。

その子は悪くない。何も関係ない。ただ巻き込まれているだけだ。

その子は、悪くない。そう、悪くない。何もしていない。何も悪いことはしていない。

何も悪いことは、していない？

それならば、おれは？ じゃあ、おれは、何か悪いことをしたのか。何か悪いことをしたから、皆が攻撃してくるのか。おれが悪いからおれは……。

違う。違うっ。違うっっ！

おれだって、何も悪いことなど、していない！ やってない！ おれは、悪くない！

ぜいぜい言いながら家に着いた。荷物と身体を玄関に投げ出した。大の字になりながら靴を脱ぎ、袋を開けた。

袋には、取り扱い説明書ともうひとつ重要な機械が入っていた。

秋也は取り扱い説明書で機材の勉強を始めた。夜9時ごろには説明書なしでも、その本体を見なくてもすべて扱えるようになった。

そして、翌日の早朝、秋也は学校に居た。机の位置や教室の広さ、ロッカーを確認した。やるべき仕掛けも済ました。

放課後、秋也はチャイムが鳴っても走らなかった。机の中から何かを探しているふりをする。そして、誰かが、襟首をつかんだら、必死で逃げようとする。悟られてはいけない。準備万端で、待ち構えていたことは。

いつものように袋叩きにあう。

ころ合いをみて秋也は、立ちあがった。そして。

「これが、証拠にござる」

秋也はポケットからICレコーダーを取り出した。一部始終が再生される。智樹が何の気はなしに思ったことを言う。

「卑怯だな。お前。昨日だって女の子放って逃げだしたし」

その言葉を聞き、秋也は怒髪天を衝くように怒る。それまで、冷静に待口調で話していたのが、秋也自身の口調になる。理性がどこかへ行った。

「っ……！ 卑怯なのは、どっちだ！ どっちが卑怯なんだよ！」

これまで一度もキレたことのない秋也が叫びだして、皆々きょとんとしている。

「これまで、お前らがおれにしたこと、忘れたんじゃないだろうな！ おれはひとつ残らず覚えてるんだ！」

クラスの男子の半分ほどが秋也を取り囲んでいた。その中には昨年同じクラスだったやつで違うクラスになった奴まで混じっていた。秋也はひとりずつ名前を呼び、これまで、何度殴られたか、蹴られたかを話す。その場にはいない者のこともすべて話した。普段なら、一人目を言い終える前にすでに袋叩きだっただろう。さきほどまでのように。

しかし、今日の秋也はどこか違った。手を出せない雰囲気があった。浅野智樹は内心、苦々しい思いをしていた。

斎藤、武田、田中、狭山、篠原、隅田、羽田、宮城、赤井、桐先。それぞれの名前が呼ばれた。行った行為も。

最後に呼ばれたのが、浅野智樹だった。智樹は、気圧されないようメンチを切る。

秋也はその目をまっすぐに見据えて、ふるえながらも冷静な声で言う。昨日、これまでの日記を集計した。そしてそれを暗記してきた。

「————浅野智樹。殴った回数、542回、蹴った回数1546回。ローリングソバット25回。タイキック45回。巩固め15回。足ひっかけ365回。上履きの窃盗10回。

そして、おれへの攻撃の首謀者。すべての元凶」

「他の奴を許したとしても、おれはお前だけは許さない！ お前さえいなければおれはもっとちゃんとした小学校生活を送れたんだ！ なぁ、なんでおれだったんだよ。なんでおれじゃなくちゃいけなかったんだ！ なんでなんだよお……」

いつもの秋也がほんの少し、顔を出す。智樹は、しめたとばかりに言葉を吐く。

「はぁ？ 理由なんているのかよっ。別に？ てめえでなくとも良かったが？ まあな—んか気

に食わねえってつうか、よお？ 運が悪かったんじゃねえ？」

静まりかけていた怒りがぶり返して秋也の中の何かを通り越した。一周回って、冷静になる。憎しみが募る。

「謝る気は、ないのか？ 誰も？」

秋也は一度、智樹から視線を外してぐるりと自分を囲んでいるクラスメイトたちを見回した。皆、ふいっと視線をそらす。もしかしたら、謝りたい奴もいるのかもしれない。しかし、智樹の前では言えないのだろう。誰も謝らなかった。そんなやつに配慮などいらないだろう。あとから謝りに来たところで、もう遅い。

「そうか。なら、みんな揃って仲良く、家庭裁判所行きだ！」

やはりその言葉を聞いてもきょとんとしている。意味がわかっていないのだろう。分かったとしてもそれほど、脅威ではないかもしれない。ただこれは、見せ札だ。切り札は別にとってある。

これでもまだ、駄目だった場合は—————。

智樹が一步踏み出した。秋也の腕をねじり、抵抗する指を一本ずつはがして、ICレコーダーを取り上げた。床に転がして踏みつける。レコーダーはパキッと音がして破壊された。

そして、秋也に掴みかかる。襟首を持ちあげようとして、ボタンが弾け飛び、ボタン型のカメラが服にぶら下がった。

「ん？ なんだ？ これは」

智樹はそれが何か分かっていないようだったが、片手でそれを握りつぶした。ぺきっという音がして、カメラは真っ二つに壊れた。

「もおしかして、てめえの言う証拠ってこれ？ こんなちっちゃえ機械で反撃しようとしてたわけ？」

「はっ。他にも持ってんじゃねえだろうな」

智樹の腰巾着である斎藤雅弘が言った。こいつは智樹よりも頭がいい。

秋也の体はくまなく調べられた。それこそ、パンツの中まで。

最後にボールペン型のカメラが秋也の目の前で、半分に折られた。

希望がひとつひとつ、絶望に代わった。

秋也の目から光が、消えた。

智樹がいつものように意地悪な笑みを浮かべた。



そうしていつものように秋也は、ぼこられて教室に捨て置かれた。けれど、その目には消えたはずの光が戻っていた。ロッカーに入れてあったかばんを無造作に掴み、ファスナーを締めて家へと帰る。

普段なら、顔の傷を見せないように両親が帰ってくるまでに、言い訳を考える秋也であるが、今日は違った。秋也は今日は言い訳をしない。

本当の事を言うつもりだ。それがどれだけ、彼にとって大変なことであるか。クラスの半分の男子に取り囲まれても、もう震えなかった秋也が、震えていた。怖かった。どんな反応をするのか。しかし、家庭裁判所への申し立てからその他もろもろ、両親の協力なくしては、これから戦ってはゆけない。

「言う。絶対言う。この先の事を考える。拙者は、こんなところで潰れるわけにはいかぬ」

母親が家に帰ってくるのはいつも十九時を回ったころだ。父親は二十時すぎの日もあれば、二十二時まで帰ってこない日もある。一人で夕食を済ませ、両親が揃うのを部屋で待った。話すべきことを再確認した。父の帰りは今日は早く、二十時すぎには玄関のベルが鳴った。父が夕食を食べ終えて、リビングでくつろぐ頃合いを見計らい、秋也はリビングへ行く。

「父上。母上。話が、あるでござる」

何度も頭の中でデモンストレーションした。二人はどんな顔をするのかなんて、秋也にはちょっと予想できなかった。けれど、どう思うのかだけは鮮明に悪い方向に、想像力が働いた。二人は傷つくだろう。自分の子供が、クラスの男子の半分からいじめられているなどと知ったら。母などは訴訟を起こすと言いだしかねない。それは好都合だった。けれど、傷つく両親を見ると、秋也もまた傷つきそうだった。そして自分を見て両親はまた傷つくのではないか。どこまでも思考がループした。しかし、乗り越えてゆかねばならない。

「なあに？ そんなに改まって。正座までして」のんびりと母が言う。

「テストで0点でもとったか？」笑顔で父が茶化す。

秋也が首を横に振ると、不思議そうに両親は目を合わせる。その平和で朗らかな様子を見て秋也の決心は鈍る。かぶりを振り、目を瞑る。両親の顔は、見れない。眼をつむったから、見えない。

「実は、拙者。いや。おれは、クラスでいじめられている。だから、」

蚊の鳴くような声だった。けれど、夜は静かで両親には聞こえたはずだ。

「だから、助けがほしい。家裁で裁判をしたい」

両親の顔は傷ついたそれではなく、安堵してほっとしたような顔をしていた。

「ありがとう。よく言ってくれた。秋也は勇気があるね。実は、な。母さん」

「私、気が付いてた。でも、やっぱり自分から言わないってことは言いたくないってことで、無理に聞き出すのもよくないって。だから、とりあえず。その訴訟の資料とか集めてどうすればいいとか、ずっと調べてたの。あなたがそう言ってくれるのを、待ってた」

「もちろん。父さんだって、一緒に調べていたんだ」

秋也がした悪い想像とは180度違った反応だった。うすうすばれているかもしれないとは思って

いたが、そこまでだったとは。

「一度、秋也が病院に行ったことがあったでしょう？ そのときの診断書はコピーを取ってあるわ。これも証拠になるはず」

「それなら僕は秋也の傷を毎日数えてたんだよ。夜中、秋也が眠ってしまってたからな」

秋也は二人の言うことに驚いた。

「全然、知らなかった。てか父さん、何やってんだよ」

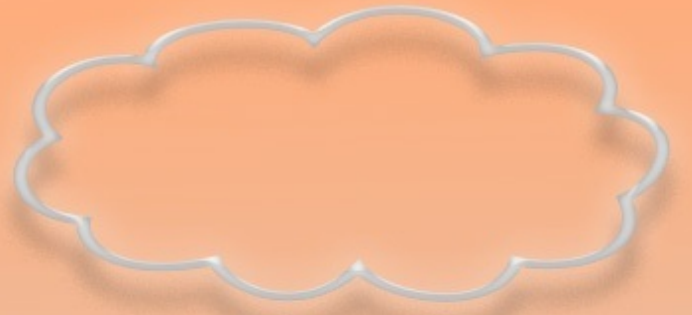
深刻な話をしていたのに、そのはずなのに不思議と笑いがこみ上げた。秋也が笑うと、両親も笑う。静かな夜に笑い声が響く。ひと笑いしてから母が言う。

「『助けてほしい』、じゃなくて、『助けがほしい』なのね。秋也も大きくなったんだね。全力で、サポートするわ」

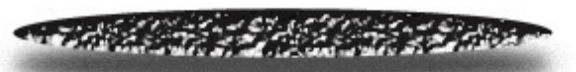
「ああ。僕たちがついてる。全力で、秋也を守るさ」

翌日、秋也がいつもよりも弾んだ足取りで学校へ行くと、浅野智樹が待ち構えていた。今日の夜、公園で話があるという。

「なあ、もしおまえが来なかったら、代わりにあの生意気な女、いじめるからな」



墓穴を掘る



## 死なない程度の落とし穴

---

ああ、気に入らねえ。

なんだよ。あいつ、急に法律がどうの、家庭裁判所がどうのって言いだして。しかも、すげえ小せえ機械で俺の声を再生しやがるし。わけわかんねえ。てか、家庭裁判所に送られたらどうなの？

智樹は勉強はできないが、運動はできた。特にドッチボールが好きだった。何せ、人にボールを思い切りぶつけるゲームである。楽しくないはずがない。いつも智樹無双などと呼ばれるほどにぶつけまくっていた。なかでも、やはり秋也が一番最後にとっておく格好の標的だった。智樹と比べるとひよろひよろした体つき。そのくせ、顔はテレビに出ているアイドル並みだった。勉強は、智樹よりも良くできた。帰り道に成績表をいちど取り上げたことがある。見て驚いて、悔しくて破いてバラバラにして溝に棄てた。

気に入らねえ。

ドッチボールで秋也の周りの男子に力いっぱいボールをぶつける。そして、秋也の顔すれすれを狙う。怯えた顔が智樹の嗜虐心をくすぐった。そして最後、チャイムが鳴ったと同時に、全身全力の力を込めて、コートの中震える子犬のように立っている秋也にぶつけた。

毎日、みんなで殴ったり蹴ったり、それはそれは楽しい日々だった。最初は抵抗していた気がしたが、だんだんと抵抗しなくなった。無駄だと知ったのだろう。

この間、可愛い女子と体育館裏で会っていたのを見た。確かに見たのだが、女子は否定した。あいつをかばおうとするやつは初めてだった。しかもそれが、智樹の好みのタイプだった。

気に入らねえ。

智樹が王様だった。しきっていた。自分がいなければ、このクラスは団結していて良い思い出を作ることなんてできないだろう。一人が犠牲になればいい。一人が犠牲になれば、一人の敵がいれば、みんな仲良くできる。智樹はそう思っていた。

あの日までは。

智樹は翌日の夜、秋也を公園に呼び出した。来なければあの女に付きまとうと一言、告げておいた。何も知らずに秋也はこのこと公園へやって来た。

「浅野智樹。おれは言ったはずだ。お前だけは謝ったって許さないと。まあ、謝るなどと思ってもいなかったが。ところで、何の用……っ」

智樹は、秋也に殴りかかった。1対1で勝負してもどうせこいつは俺には勝てないのだ。そのことを思い知らせてやる。二度と智樹に抵抗など、反逆などしないように。

「はっ。誰がためえなんざに謝るかよ。馬鹿じゃねえのっ」

ジョブを繰り出しながら智樹は、秋也を挑発した。

ゆっくりとゆっくりと誘導する。不自然じゃない程度に秋也を追い詰める。

と、これまで逃げるばかりだった秋也が右の拳をぶつけてきた。智樹は完全に油断していた。これまでの経験から、こいつは殴り返すことなど無いとそう思い込んでいた。

「……っ」

長く伸びた爪がかすれて、頬が切れる。拭って血を見て、怒りがこみ上げる。

秋也はそれを見て、逃げる。

落とし穴の事は、忘れた。

一度、ぼこぼこにしてやらなくてはならない。その考えで頭が埋め尽くされた。

そして、追いついた。それほど狭くない公園だが広くもない。このときどうして秋也が公園の外に逃げなかったのかを深く考えてさえいれば、智樹は。

「さあ、追い詰めたぜ。こっからどこに逃げる？」

秋也の背中には塀があった。

智樹は人を殴るとき、最初に思い切り腹に一発入れることにしている。相手が強いとなかなか綺麗には決まらないのだが、秋也が相手なら簡単だ。今回も思い切り決まった。秋也はしばらくは立てないのではないか。そう思うくらいに綺麗に入った。

「ははっ。これがお前の本気か？」

口の端から血を垂らしながらも秋也は挑発してくる。塀に手をつきながらも立ち上がり、こちらに向かって地面を蹴りあげた。

「うあっ」

砂が目に入る。その隙に秋也は智樹にタックルをかまして、突き飛ばした。距離をとってまた挑発する。今度こそ、智樹はぶち切れた。

全力で秋也を追いかけた。

そしてようやく落とし穴へ落とす絶好の場所へ追い詰めた。目立たない目印を頼りに智樹は秋也を追い詰める。一步、二歩、三歩。あと一步。

踏んだっ。

だが、秋也はこれみよがしにぴょんぴょんその場で飛んでいる。後ろで手を組んでいる。

あれ？ おかしい。落ちる筈なのに。落ちない。何故？

智樹は、慎重に一步前に踏み出した。

それと同時に秋也が後ろに組んでいた手を前に出した。秋也の右手には自分の携帯が、左手には、智樹の携帯が握られていた。闇の中、動画撮影の赤いランプがちかちかと光っていた。

智樹は、自分で作った落とし穴に引っ掛かった。昨夜一晩かけて作った梯子がないと昇れないほどの深い穴である。

「うわあああああああああああああああああああああつ」

酷く腰を打ちつけた。地面から秋也が携帯とともに顔を出す。智樹の携帯を操作している。いつ盗られたんだ？ 智樹は眼つぶしをされたあとのタックルを思い出した。

「これで、よしと」

地面から聞きたくもない声が届く。ぱらぱらと土が落ちてくる。

「お前の行動なんてお見通しだ。おれにはお前が公園で穴掘りをしていたという情報が入っていた。長距離走だけはお前に鍛えられたからな。おかげで、先に場所を確認できた。目印もずらすことができた。それだけだよ」

「何の用だと、しらじらしい。知ってたんじゃねえかてめ！ くそつ。馬鹿にしやがって」

「.....馬鹿にしたのは、どっちだ。これまで毎日毎日、馬鹿にしてたのは、どっちだよ。お前じゃないか。

これまで、おれがどんな気持ちで毎日学校にいったかお前にわかるのかよ。わかるわけないよな。わかってたまるか。お前なんかにはわかってたまるかよ。

智樹が家庭裁判所に行くのは、決定だけど、おれにはまだ切り札がある。

お前らに対抗するためには、どれだけだって非道にも卑怯にも残虐にだってなってやる」

秋也は智樹に切り札の内容を告げた。あのときもうひとつだけ、教室にあったもの。

そして立ちあがって、智樹の携帯を操作する。動画が再生された。智樹が足を踏み出すところから落とし穴の底に落ちるところまでの動画だった。穴の底から動画なんて見えなかった。ただ画面が光っているのが見えた。動画の最後、自分の声が恥ずかしく響いた。

「とりあえず、穴の中で反省してろ。まあ、死ぬ前には出してやるさ。あ、携帯はお前んちのポストに入れといてやるよ」

秋也はその辺の木や葉っぱを上手くまとめて穴を隠した。ぎゃあぎゃあ叫ぶ声が響いていたが、住宅地からは少し離れた公園である。少なくとも明日までは誰も気がつかないだろう。死ぬ前というのは、怖がらせるために言っただけである。

昼休みも終わりの頃、智樹の母親が怒鳴りこんできた。顔を真っ赤にして、叫び散らしている。昨日息子が一晩帰ってこなかった。代わりにポストに入っていたのが息子の携帯電話だ。動画を再生しろ、というメモとともにそれはあった。朝、消防所から連絡があって落とし穴に落ちて

いたという。あれほど深い穴に落ちたのに擦り傷以外は大した外傷もなく無傷だったらしい。まあ、これから心に深い傷を負うことになるだろうが。

「誰なの？ 誰が落とし穴を作ったの？ 答えなさいよ！ 誰があの子を落とし穴に落としただのよ！！ 誰が携帯電話をポストまで届けたの！」

クラスがしんと静かになった。誰も答えなかった。落とし穴は智樹が取り巻きと協力して作ったものだった。クラス中がそれを知っていたが、誰も言わなかった。

「証拠があるのよ！ この、智ちゃんの携帯に残ってた動画が」

拙い動作で、携帯を操作し、智樹の母親は動画を再生させた。智樹が一步踏み出したときから、落ちるまでの短い動画だった。静かな教室に智樹の断末魔が空しく響いた。動画はそこで途切れている。秋也の声が入っていないのはもちろん確認済みだった。智樹が自分から自分で作った落とし穴に落ちる様子をクラス中が知った。

どこからともなくくすくすという笑い声が聞こえ始めた。

一人の敵がいれば、みんな仲良くできる。

それは秋也である必要なんてなかった。たとえば、智樹であっても良かったのだ。

「私、デジカメはいらない。これより新しい機種のデジカメを持ってるから。携帯でも動画は撮れるし。買うならもっと最新のやつ買ってよね。お父さんってお金使うの下手だよね」

しかし、父がそれほどまでに肩入れする少年に少しの興味があった。酷くいじめられているというのは、この間、靴箱を見たときに分かったが。見ればわかると父に聞いていた。そういう意味だったのかと6-4の靴箱に来て初めて分かった。

ありとあらゆるゴミが詰め込まれていた。触るのも嫌だったからそのまま渡すものを突っ込んでおいた。剥げかけた名前シールは也の文字だけが読めた。なんとかなに也。

翌日、どんくさい父は説明書を渡すのを忘れていたという。じゃあ、ついでにデジカメも一緒に渡そうと思い、理乃は靴箱にメモを入れた。体育館裏に來い、と。簡潔すぎていじめっこに間違われぬか杞憂したが、彼は放課後すぐに来た。走って来たのに息は切れていなかった。わりと格好いい顔をしていた。それなのになぜいじめられているのか。否、顔がいいこと自体、妬みの対象となる。それは理乃自身も経験として知っていた。

理乃は袋を手渡した。

「つうか、逃げてっていうからって女の子一人放って逃げるかしら。まあ、私が逃げろって言ったけどさ」

目の前に現れた割とごつめの男子数人に詰め寄せられたが、理乃は怯まなかった。

「何か用？」

「お前、誰だ？」

「誰って、誰でもいいでしょ。あなたこそ、人に名前を聞くのなら、まずは名乗りなさい」

「あ、浅野智樹だ」

「そう。私は秋野理乃。今日は、ピアノの日だから帰らなくちゃ。そこどいてくれる？」

「何を渡した？」

「何をって何が？ 何のこと」

「さっき、ここに男がいたろう。そいつに何を渡したんだ？」

「何にも」

「しらを切るつもりか。てめえ」

智樹は低い声で凄んだ。しかし、理乃には効かない。

「これだから男子って嫌なの。なんでも力で解決すればいいって思ってるでしょ。違う？」

「お、俺は違う！」まさにそうなのだが、智樹は否定した。

「そう。じゃあ、簡単なクイズをして解決しましょ。私が出すクイズに正解したら、何かを渡したことにしてもいいわ。間違えたら、そこを通してよね」

「.....わかった」

完全に理乃のペースに呑まれている。

「それじゃあ、簡単な問題をひとつ。禍福は糾える縄のごとってどういう意味？」



その場に居たのは、クラスの中でも足が速い、智樹と他数名。斎藤雅弘は足が遅かったのでその中にはいない。

「……くそう。マサなら、わかるはずだ」

「制限時間もうすぐ終わり。どう？ 答えないの」

智樹はやけくそに答えた。

「赤福には縄のようなもので形を作っているという伝説がある」

理乃は何も言わずに、通り過ぎる。静かに笑いを堪えていた。そして1メートルほど離れて振り返って正解を言う。

「不幸と幸福は一時点では判断しきれないってこと。不幸が幸福になったり、幸福が不幸になったりするの。間違っても赤福なんかじゃないから。ぷぷ」

智樹の顔が真っ赤になる。鼻息を荒くして理乃へ近づこうとした。そのとき、運動部の部活の準備が始まり、体育館裏は着替えのために訪れた運動部部員でいっぱいになった。

「て、てめえ」

「これだけ、人の多い場所で、あなたに何ができるというのかしら？」

理乃は颯爽と立ち去った。

あれから数日。

「あのさ、本当にありがとうって君のお父さんに伝えておいて。それと、秋野さんにもお礼を言いたいんだ。本当にありがとう」

「嫌よ。住所教えるから、お父さんには勝手に言いに行っちゃってよ。私は別に何もしていないわ。ただいらぬ物を捨てただけ。それが役に立ったんなら良かったとは思うけど」

「役に立つというか。救われた。あのデジカメがなかったら、おれはまだあのままだったかもしれない。デジカメが最後の命綱だったんだ」

「ていうか、私詳しく聞いてないんだけど、わけわかんないから最初からちゃんと話してよ」

「時間いいの？」

「今日は、うん。じゃあもう、お父さん家で待つ？」

理乃と秋也は秋野家で話している。

「その日の朝に、おれはロッカーにデジカメを仕掛けた。君からもらったやつ。あれかなりの高性能で連続十時間録画が可能だったんだ」

「嘘？ そんなに録画できたかしら」

「低画質だけど、できたんだ。おれのロッカーはぼこぼこで穴が開いていた。ぼこぼこになる前はみんなのゴミ箱だったけれど、誰かが思い切りけって開きにくくなってからは誰も触らなくなってたんだ。それでそこにデジカメをセットした。新学期の次の日に学校に来た時にロッカーに穴があいていて、そのときは本当に悲しかったんだけど、でも、それを利用することができた。それから、みんな帰った後におれは教室からカメラを回収した。それをパソコンに移してバックアップを取った」

秋也が話し終えたころ、母の倫がパートから帰って来た。人見知りの理乃が友達を連れてくる

なんて珍しい。そう思っているのが表情に表れていた。

「あら、いらっしゃい」

「こ、こんにちは。おじゃましてます。えっと、鳳秋也といいます」

秋也と理乃はいきさつを簡単に話した。すると倫は、

「お父さん9時すぎないと帰ってこないと思うわよ。ごはん食べていったらどうかしら。今から作るから一人増えても大丈夫だし。おうちの人はどう？」

「あ。共働きなんで大丈夫です。いなくても」

「じゃあ、決まりね」

「本当に、ありがとうございました」

「え？ 本当にそんなことがあったの。信じられないなあ。でも、嬉しい。僕にできなかったことを君はやり遂げた。僕がタイムマシンに乗らなければできないようなことを君はやったんだ。君に贈ったものは壊されてしまったようだけど、でも、無事に解決して良かった」

利雄は畳みかけるように訊ねる。自分の起こした行動で少年が変わったことが嬉しかったらしい。しかし。

「それで、今は君、学校へ行くのが楽しくなったんだね」

「いいえ」

「え？」

「楽しくはありません。変化といえば皆がおれを攻撃してこないというだけです。攻撃対象が変わっただけです。おれは腫れもの扱いですよ。でもまあ、前に比べると楽です。ずっと楽です。前は超鬱だったのが今は憂鬱くらいです」

「鬱なことには変わらないの？」

「ええ。変わりま」

と、そこで秋也は理乃と目が合った。何故か理乃が秋也の言葉を遮った。

「変わるわ、きっと。これから」

それが何を意味するのか、誰も理解できなかった。理乃には何か考えがあったようだ。秋也はお礼を言って十時前に秋野家を出た。

一ヶ月が過ぎたころ。

「秋野さんがいて、証拠があるから、おれはあいつらを家庭裁判所に送ることができるんだ。日記とか、医師の診断書とかが証拠になるなんて知らなかった。両親がすごく協力してくれてる。でも、それだけなんだ。結局。それしかできなかった。一度だって殴り返すことさえできなかった。あ、一回だけ殴ろうとはしたけど、かすっただけだった。だから、何も変わってない」

「変わった。少なくとも、鳳くんは、いじめられっ子から、普通の子になったんだよ。いじめっ子にはならないで、普通の子になった。それってすごいことだと思う。私なら、きっと率先してそいつをめて、殴られた回数だけ殴り返して、蹴られた回数だけ蹴り返して半殺しにしようと思う。それをしないのは、すごい」

「ははは。秋野さんは怖いな」

「やろうと思えばできる立場に居るんだもん。鳳くんのクラスでまた新しい人がいじめられるようになったって聞いている。それって、あいつでしょ？」

「……、まあそうだけど。でも、もういい。奴らからふんだくった金でおれは私学の中学に行く。それから頭のいい高校に入って、大学に行く。おれをいじめていた奴らなんかよりずっとずううっと良い大学に。それで良いんじゃないかと思う。きれいごととかそんなじゃなくて、自分自身の将来の事を考えて、そう思う。おれの将来にはあいつら関係ないから」

くそっ。これまで俺の言うことを聞いていた奴らが、俺を嵌める。貶める。陥れる。  
一対一では絶対に負けることのない奴らが、よってたかって俺に飛びかかってくる。束でかか  
ってこれたら勝算は、無かった。

「辛いかな？ 浅野くん」

床で智樹が寝ていると声をかけてきたのは、秋也だった。今、最も智樹が話したくない相手だ  
った。今の状態になったのは、全部こいつのせいだ。だが、こいつは攻撃には参加していない。  
それが少し、意外だった。智樹はこれまで何度も殴って蹴ってきたことを思い出した。どうして  
、攻撃してこない？

「はっ。うるせ。失せろ」

「このクラスでは、皮肉にも、たぶんおれが浅野君の気持ちがわかると思うんだけど」

そう言い残して秋也は立ち去った。頭に秋也の言葉が木霊する。

浅野君の気持ちがわかる、だぁぁあっ？

「てめえなんざにわかってたまるかっぁぁあ」

智樹は吠えた。

やられて、黙っている智樹ではない。

浅はかながら、対策を考えてきた。

俺もあいつがやったように、証拠を押さえてやる。

それも裁判所なんてまだるっこしい方法なんて使わずに、すぐに結果がでるようなやり方であ  
いつらをぶちのめしてやる。

用意するものは、新しい携帯電話だけだった。

思いついたその日のうちに、最寄りの携帯ショップへ行き、機種変更をしてきた。幸い、母も  
父も智樹には甘かったので、好きな機種を選ぶことができた。あとは楽しみに明日を待つばかり  
である。

そして翌日。

智樹はいつものように、以前と同じように登校してきた。フル充電した携帯を片手にうきうき  
と登校してきた。いじめられている生徒のようには見えなかった。しかし、靴箱に着いて顔色が  
がらりと変わった。これまで生きてきて、智樹は加害の方か、被害の方かという、加害の方だ  
った。これまで、ずっと。だから、靴箱にゴミが入っているのを見て、地団太を踏んで悔しが  
った。秋也は平然としていたことを思い出し、すぐに冷静になる。

昼休みまでの、我慢だ。

今日の4時間目の体育は、ドッチボールだった。いつもなら何も言わずとも智樹にはパスがどん  
どん回ってくる。そして、時には相手チームを全滅させたりしたこともあった。それが、今日は

一度もパスは回ってこず、ボールが飛んで来ないので当てられることもなかった。ただただコートに突っ立っているだけだった。

そして迎えた昼休み。

智樹は給食を食べ終わると、すぐにトイレへ行って携帯を操作した。胸が高鳴る。トイレを出ると、クラスの奴らが十人で、智樹を待ち構えていた。

「ちょっと、面かせ」

智樹は何も言わずについてゆく。職員室から遠い中庭で凹られるのだろう。抵抗したところで、引きずられていくことは分かっていた。なら、そんな姿を他のクラスの奴らにまで見られたくない。

左胸のポケットには、穴が開いていた。昨夜携帯のカメラの位置に合わせてハサミで切って開けた穴だった。

そして携帯電話は、自動的にノコノコ動画で生中継をしていた。

タイトルは、「星空小学校6年4組、いじめの実態」

ノコノコ動画は最近始まったサービスで、動画にコメントをつけられる上、ツイッターのつぶやきや、ブログの一言、ミクシーのボイス、フェイスブックのいいね、ほかたくさんに関連する言葉を動画上に流すことができる、ある意味画期的なサービスだった。

匿名と実名が入り混じり、使う層も低年齢の未成年が多く、炎上し易いという欠点があったが、それでもおもしろいので人気は高かった。

智樹の生中継も例外にもれず、炎上した。

ただ、視聴者は智樹のことを知らなかった。これまで彼がしてきたことを知らなかった。だから、ここでは智樹は完全なる被害者として扱われた。どこかのクラスにリアルタイムの視聴者がいたのか、一人、また一人と、実名が書きこまれていった。

星空小学校には多数の電話が入り、職員室の電話回線はパンクした。中には、学校に詰めかける人さえいた。騒ぎが大きくなって新聞にも載った。

勝った。おれは一人で立ち向かって勝ったんだ。

智樹は勝利に酔い痴れた。しかし、それはぬか喜びだった。

一時的に智樹への攻撃は止んだ。それは表立ってのものだ。

智樹への攻撃はより陰湿なものへと変わった。それこそ、机の上にお花が置いてあったり、椅子の裏に画鋐が貼ってあったりするようになった。教師までが疎ましい目で智樹を見るようになった。連日、職員室へ非難の電話が鳴りやまなかったためである。平時、ちゃんと仕事をして、部活の顧問までやってくたくたになって帰って、授業の用意をしているのに、それに加えてクレ

ーム処理だ。一人の馬鹿な生徒のせいで、仕事が増える。しかもその生徒は、ついこの間まで別の生徒をからかっていたのを教師たちは見かけていた。注意をしてもはぐらかされてきた。その本人が、動画中継などを学校内でやらかしたのである。快く思われるはずがなかった。

「助けてやれなくもないよ。方法はある。たぶん。おれは浅野君のことが嫌いだからもう少し、そういう姿を見ていたいっていうのもあるけどね」

智樹は答えなかった。しかし、自分ひとりで考えた方法は失敗だった。こいつに聞けば何かが変わるのか？ いや、そうだとしても聞きたくもない。絶対こいつにだけは頼りたくない。たとえどんなに苦しくてしんどくてもそれだけは。けれど、智樹が何も言わないから秋也は、構わず続けてい言った。

「偉くなれば、いいんだよ。あいつらより。まあ、成績の悪い浅野君はとても大変だと思うけど。それからは浅野君次第だろうね」

体中がぼろぼろだった。もちろん心だってそうだ。智樹は、家を出たら泣きながら学校へ通うようになった。母親には言えなかった。言ったら、先月のように学校へ乗り込んでくるに違いなかった。しかし、言わなくても情報は伝わった。

ある日、智樹の両親に学校から呼び出しがかかった。智樹が中継した動画の件についてである。智樹も一緒に応接室に呼ばれたが、両親と顔なんて合わせられない。

「それで、ご存じかとは思いますが、一応説明の方を」

「はあ？ 一体何のことでしょうか」

父親は仕事一筋で、母親は智樹のことは大事だが、甘やかし過ぎている節があった。

「お聞きになっていない？」

「ええ。うちの智樹がどうかしましたか」

「普段と違った様子ではありませんか？」

浅野夫婦は顔を見合わせた。

「「いいえ」」

「それならば、説明します」

かくかくしかじかで、お宅のお子さんが、どうやらいじめを苦にして動画を中継してしまったようで、こちらとしては業務に差し支えて困っていますと。

その説明を聞き、両親は顔面が蒼白になった。

「知らなかった。智樹がそんなことをしていたとは。おい、麻子。そういえば、この間携帯を変えたと言っていたな。そのときにどうして気付かなかった？」

「気付くわけじゃないじゃない。だって、ただ携帯を変えただけよ。大体、あなただって、この前の落とし穴のとき、智樹と一言だって話そうとしなかったじゃない！」

「あれは、仕事で疲れていたんだ。徹夜明けだったんだ。仕方ないだろ！」

「いつもいつもいつも。仕方がないが免罪符になるって思ってるんじゃないわよっ」

「まあまあまあ。お父さん。お母さん。そう熱くならないで。我々としても起こってしまったことは仕方ないと考えているんです。過去へはもどれませんから。それよりこれからです。これからどういった対策をとるか。これは智樹君の将来にも関わる問題です」

いじめという問題について、教師ができることは非常に限られています、と教頭は切り出した。

「まず、証拠を押さえるのが難しいこと。授業中は先生がいるが、それ以外の時間はずっと見張っているわけにはいかないこと。どれだけ気をつけて目をかけていたとしても、仲間内でふざけて遊んでいますと言われればそれ以上の追及は難しいこと」

実は、と言いにくそうに教頭は頭をかいた。

「実は、智樹君はついこの間までは、そういう生徒でした」

「そういう生徒、とは？」

「教師が目をつけていて、声をかけるような生徒でした。返答はいつも、みんなで楽しく遊んでいますということだけです。」

そして、先月のことです。智樹君が落とし穴に落ちたころ、ある生徒が家庭裁判所に訴えを起

こしました。智樹君を除いた、彼の仲間は全員、民事法によって訴えられました。でも、何故か智樹君は、訴えられなかったんです。一体どういう意図があってそうしたのかはわかりませんが。もしかしたら智樹君が何か知っているのかもしれないと訊ねたのですが、彼は口を閉ざしたままでした。あの落とし穴に落ちた事情を聞いたときと同じです。黙秘権を行使します、と一言。それだけです」

「そんなことがあったんですか。全然知らなかった」と父親が言う。

「初耳です。どうして智樹はよく学校の事も話してくれるのに。そんなことは一言も」母親も言う。

「ええ。ですが、それでも学校は、智樹君を守るつもりです。いえ、たとえ過去に間違っことをしていても、今、彼が攻撃を受けているのならば、彼は保護されなければなりません」

「それで、学校ではどういう対策を……？」

「休み時間も教員を教室に配置したり、お弁当も教室で一緒に食べるようにしたり。とにかく生徒から目を離さないように配慮するように致します」

智樹は項垂れた。結局、教頭にとっても、両親にとっても、それは他人ごとなのだ。これが他人事でないのは、たぶんあいつ一人だけだろう。いや、もう他人事になったのだが。癪だった。あいつの言う通りにするのは。でも。目の前の大人三人の話よりもよっぽど説得力があった。その日から智樹は、死ぬ気で勉強を始めた。

そして、自分を知っている人が通わないようなレベルの私立中学に合格した。



どんなに嫌なことも、立ち向かい解決さえすれば、通過点となって嫌な思い出の一ページになるだけ。立ち向かわなけりゃ、それが現在のまま。嫌なことがずううっと現在のまま。とても嫌なこと、本当に嫌なことがあって、初めてわかった。

それは、まあ、何十年も前のことだけど。

鈴木倫は、母を父に殺された。半分事故のようなものだった。しかし、筆筒の角で頭を打った母の様子はいまでも夢に見ることがある。救急車が来るまでの恐ろしく長い時間。みるみると冷たくなっていく身体。何もできない自分。小学校に入学して間もない小さな倫が大人の喧嘩を止めることなどできないのは、わかっていた。でも、それでも。

一度に母も父も失った。

だから、ひねくれているのだと倫は思う。それでも、自分がひねくれていることが分かったからといって自分でどうにかできるものでもない。能力や成績は努力次第で何とか変えられるが、性格ばかりはどうにもならなかった。

四十人もの生徒が狭い教室にぎゅうぎゅう詰めになって学んでいる。高校では母と父の事情を知っている人も中学と違ってほとんどいなかった。けれど、倫はあまり人と深く関わることをしなかった。友達はクラスに一人だけ。真田翔子。必要以上に人と話すことはなかった。

「りん？ どうしたの？」

「ん？ ああ。翔子ちゃん。眠いの」

「また、眠れなかったの？」

「ん。そう。だから、きゅうけいじかんもねるう」

「おやすみ」

翔子は笑いながらそう言うと、倫の机から離れた。眠そうな倫と無理に話していてもつまらない。気が済むまで寝かせてあげようと思った。しかし、夏休み明けの教室は喧騒に包まれていた。積もる話もあるのだろう。

そして、教室の隅では、男子が集まっていた。

サンドバッグにされているのは、秋野利雄。夏休みは彼にとって、救いだっただけだ。そして、今日からまた、地獄が始まろうとしていた。

「ひっさしぶりー。ぶたくん。元気にしてた？ って聞くまでもねえか。みりゃわかる」

「まるまる太ってんもん一。焼いたらおいしそうだな」

それまで言われっぱなしだったのに、夏休みに何かあったのか、利雄は毅然とした顔で言う。

「僕は、もう、今までの僕とは違う。来るなら、来いっ」

そして利雄は袋叩きにあった。夏休み前と何一つ変わってはいなかった。

殴る蹴る。嘲笑う。罵倒する。誰かが、利雄を突き飛ばした。

積んであるバケツに当たり、がしゃがしゃんと耳に刺さる音がした。

「うああっ。もうっ。うるっさ——いっ」

鈴木倫は、寝ぼけたまま机の上に立って叫んだ。倫の方が何倍もうるさかった。そしてバランスを崩して盛大にこけた。

「りんっ。大丈夫っ？」

「大丈夫むにゃ」

叫んで机から落ちたのにも関わらず、倫は眠っていた。翔子は呆れかえった。

新学期が始まって数週間が経過した。

自分の言った一言が、事態をより悪化させた。そんなつもりなんてまったくなかった。むしろどうでもいいと思ってさえいた。他人の事なんて、どうでも。

「お前、鈴木にまでうるさいって言われてたな」

「僕を突き飛ばしたからじゃないかっ」

「夏休み終わってから、なんかよくしゃべるようになったよな」

「そうそう。だ、ま、れ。うぜえんだよ。サンドバッグがしゃべると」

そう言ってまた利雄を突き飛ばす。いつもは脂肪で跳ね返る利雄だったが、当たり所が悪かった。利雄が突き飛ばされた先には、棚が置いてあった。その角で利雄は頭をぶつけた。

つつつーっと一筋、利雄の頭から血が流れてきた。一斉に、取り囲んでいた奴らが一步引く。当の利雄は何が起こったか理解していなかった。静寂が訪れる。囲んでいた奴らは目を合わせる。救急車が必要なレベルなのかどうか。必要かもしれない。一筋だった血はどぼどぼと流れ出て、利雄の顔を真っ赤に染めた。

そのとき、倫は翔子と好きなおやつについて話していた。がやがやうるさい教室が突然静かになったものだから、クラス中が利雄に注目した。

倫もその顔を見た。十年前にも、倫はその血に染まった顔を見た。

それを見たときに、倫は後先考えずに叫んだ。母に重なって見えた。

「あなた、私のどれーになりなさい。そしたら、一生守ってあげるからっ」

本当に後先考えていなかった。同じクラスだったにも関わらず倫は、彼の名前すら知らなかったのだ。クラス中がぽかんとしていた。笑っていたのは倫の友達の翔子だけだった。倫のひねくれ具合を理解していたのは、クラスで翔子しかいなかった。そして、倫の事情を知っていたもの翔子だけだった。

クラス委員の女子によって救急車が呼ばれ、利雄は事なきをえた。数針を縫う手術が必要だったが、命に別条はなかった。

それから、倫は必死だった。

自分の過去と向き合うのにも、今を生きることにも、未来の事を考えることにも。

「守る」と大口を叩いたからには実行するしかない。

最初の最初に倫がしたことは、図書館に行って法律について調べることだった。そして医師の診断書を手に入れ、それをもとに、刑事告訴を考えているということをひとりひとりに周知して回った。二十年以上前の事である。得られる情報も限られていた。それでも倫は努力して、利雄を守った。

そして倫は、まず利雄に痩せることを命令した。

近くに居ると暑苦しいからである。気温上は太っていようが痩せていようが大して変わらないらしいが、やはり見た目は重要である。もうすぐ、夏が来ようとしていた。倫は具体的なスケジュールを提案した。

「これ。これの通りに動くの。わかった？」

それを受け取り、反論した。

「こんなの無理絶対無理」

「じゃあ、やめる？ みんなのサンドバッグに逆戻りでもいいのかしら？」

「ひいいいっ」

彼は動けるデブだった。運動させることよりも、おやつを止めさせることの方が難しかった。倫はおからやとうふ、あらゆる食材を使って、ローカロリーのクッキーやケーキを作った。それでもまだ隠れて食べているようだったので、一度家に忍び込み、全てのおやつに下剤を仕込んできたこともあった。次の日、彼は学校を休んだ。次の次の日、若干痩せているように見えた。これ以降は、ちゃんとおやつも倫の作ったものしか食べなくなった。ひと月がすぎ、ふた月がすぎ、彼は順調に痩せていった。

体重減量とともに倫が彼に命令したのは、勉強することである。中でも利雄が苦手だった国語と英語は倫が教えることになった。国語と英語が苦手な翔子も一緒に勉強することにした。翔子は数学が得意だったので、二人に教えた。利雄は社会がマシだったのでノートをコピーした。三人の成績は飛躍的に伸びた。

そして一年が過ぎた。

彼は面影がないほどに痩せていた。いや、体重としては平均体重以上はあるのだが、元が太り過ぎていたので別人のようになっていた。今や、高校二年生にしてサッカー一部のエース的存在にまでなっていた。盛大にモテた。しかし、彼について一切、浮いた話など聞かなかった。それがさらに人気に輪をかけた。

「ねえねえ。りん。トシオってさあ、別人になったよね」

「そう？ 変わらないわよ、全然」

「りん、視力いくつ？」

「裸眼で0.01もないんじゃないかな」

「眼科に行きなさい」

「ちゃんとコンタクトで補正してるもの。今の私の視力は1.5よ」

「じゃあ、なんで変わってないなんて言うの？」

「さあ？」

目指すものの違いから、三人は違う大学に行くことになった。

そして三十年が過ぎて、今も二人は。

「父さんな一。昔、サッカー部だったんだよ」

「え？ サッカーでぶ？」

「良子ちゃん、酷い。写真だってあるんだぞ」

「どれよ。いないじゃない」

「これだよ。このボール持ってる人」

「……」

良子は写真と利雄の顔を何往復もした。しかし、それでも信じられない。

「うっそだあ。違う人だよ。ねえ、お母さん。お父さんが嘘付いてるよー」

倫がアルバムを見ている二人の傍へやって来て、

「嘘じゃないわよ。写真は真を写すって書くじゃない？ まあ、別人に見えなくもないけれど。でも、私から見れば、ずっと変わらないわ」

拙作をお読みいただき、まことにありがとうございました。  
少しでも楽しんで頂けたのならば幸いです。

今回の作品の課題としては、3人称の視点が変わるころと話に一貫性があまりないところでしょうか。

もっとおもしろい、読んでいて楽しくなるようなお話を書いていきたいです。

## 地獄に仏

<http://p.booklog.jp/book/33511>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33511>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33511>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.